

ボランティアスタッフにおける自己変容への意識に関する一考察 —子ども食堂での福祉実践を通して—

織田 杏里*・松島 生幸*・稲垣 応顕**

(令和2年1月31日受付；令和2年4月14日受理)

要 旨

本研究は、子ども食堂でのボランティア活動に参加したスタッフの自己変容への意識に着目し、ボランティアが自己変容の意識に及ぼす影響を明らかにすることを目的とする。北陸地域に立地する国立A大学と県立B大学の学生21人を対象に質問紙調査を行った。子ども食堂でのボランティア参加への動機とスタッフが考える“子ども食堂”のイメージなどについて自由記述で回答を求め、M-GTAに依拠しカテゴリー分けを行った。結果、ボランティア参加への動機として、自発的な動機や他者からの紹介が決め手であることが示唆された。また、スタッフが考える“子ども食堂”に対するイメージが、ネガティブなイメージからポジティブなイメージへと変容したことが窺えた。

本研究ではさらに、承諾の得られた協力者に上述の結果を踏まえた半構造化面接を実施した。結果、学生は子ども食堂でのボランティア体験における他者との交流を通して、「本当の自分」「今まで気づかなかった自分」「新たな自己の発見」「子どもとの関わり方を知る」「自分を成長させる」など、自己の在り方と変容（成長）の意識化が促された。

KEY WORDS

ボランティア volunteer 子ども食堂 Children dining room 自己変容 Self-transformation

1. はじめに

第二次大戦以降の我が国では、核家族化や都市化などの社会環境の変化を背景に、貧富の差の拡大（＝貧困家庭の増加）、家庭や地域の教育力の低下などが指摘され続けている。他方、この問題に関連して筆者らは、稲垣(2009)が親子関係の悪い子の背景として指摘する、親子の温かな感情交流の不足、仲間同士の関係性形成の希薄化現象を捉えている。それらの問題は、社会性の未発達やコミュニケーション能力の空洞化など、子どもの心理・社会的問題を深刻にし、負のスパイラルを描いているようにも見受けられる。今日の学校では、そのような問題に対して主体的・対話的で深い学びと呼称される『アクティブ・ラーニング』が注視されている。筆者らの感覚では、ボランティア活動はその学びに適しており、それを体験する学生にポジティブな変容(成長)をもたらすことが期待できると考えている。おりしも2021年に東京オリンピックが開催されることと相まり、上述の活動への関心は高まっている。ボランティア活動については、生涯学習審議会(1992)が「個人の自由意志に基づき、その技能や時間等を進んで提供し社会に貢献すること」と定義し、国民生活審議会(2007)は「自発性に基づく行為であり、かつての慈善や奉仕の心にとどまらず、地域社会への参加や自己実現、相互秩序、互酬性といった動機に裏付けされたもの」と述べている。

また、厚生労働省(2007)はボランティア活動がボランティアである所以について「自主性(主体性)、社会性(連帯性)、無償性(無給性)の精神」を掲げている。前述の生涯学習審議会答申(1992)は、生涯学習について「学校や社会の中で意図的・組織的な学習活動として行われているだけでなく、人々のスポーツ活動、文化活動、趣味、レクリエーション活動、ボランティア活動などの中でも行われる」と述べている。中でも東京都教育委員会(2014)は、次代を担う子どもたちへのボランティア精神の普及、生涯を通じて様々な場面でボランティア活動に目を向け活躍できる人材の育成を提唱している。ちなみに、カウンセリングを学問体系としてまとめたCarl Rogers(1980)も「人間の成長とは、自己内部の極めて主観的で重大な感覚的・内臓的な経験を通して起こる」と述べている。筆者らは、平穏な日常の中で生活している人々にとって、ボランティア活動が上述の変容を起こしうる体験になると考えている。

近年では、子ども食堂の存在が注視されている。湯浅(2019)は、子ども食堂の意義について「地域交流拠点」、「子どもの貧困対策」の2つの機能を挙げている。また神谷(2019)は、今日の子どものために必要なのは経済的な支援以上に「様々な人と関わる機会」であり、立場の違う者と「共に学ぶ」機会と場所の提供であると述べている。支援するボランティアスタッフ(以下、スタッフ)はその主役である子どもを支える存在であり、活動での「学び」は、スタッ

*修士課程（学校教育学系） **学校教育学系

フ自身の自己変容(成長)を促進する機会でもある。

そこで本研究では、子ども食堂のスタッフを対象に、当該の活動に参加する前後の自己意識を比較し、その変容を考察することで、ボランティア活動がどのような自己変容(成長)を引き起こすかに示唆を得ることは意義があると考ええる。

2. 研究の目的

子ども食堂に参加したスタッフを対象に、当該活動の体験前後の自己変容への意識の度合いと内容を主観的側面から捉えることを目的とする。

3. 研究の方法

3. 1. 研究1 質問紙調査

3. 1. 1. 調査の目的

研究1では、子ども食堂でボランティア活動を行ったスタッフの自己意識の変容(①ボランティア参加への動機、②子ども食堂におけるイメージの変容、③ボランティアを行ったことでの自己変容の度合いと内容、④今後におけるボランティア参加への意欲)を把握し、その背景を明らかにすることを目的とする。

3. 1. 2. 調査対象

北陸地域に立地する国立A大学と県立B大学の学生21人(男子6人、女子15人)。

なお、本調査の研究フィールドは、子どもの孤食対策を目的で設立されている。

3. 1. 3. 調査時期・方法・内容

調査時期は2019年12月。調査方法は、集合調査による質問紙調査。

対象者(以下、協力者)全員がボランティア活動を行っている子ども食堂において、研究の趣旨、目的、研究倫理(回答は任意であること、無記名であること、回答は研究以外に使用しないことなど)について説明し、協力を依頼した。全員の承諾を得たことから、調査用紙への回答を促した。なお、調査用紙は独自に作成したものであり下記の内容で構成した。

- (1) フェイスシート(性別・年齢・参加歴)
- (2) 子ども食堂でのボランティア参加への動機(自由記述)
- (3) スタッフが考える“子ども食堂”のイメージ(参加前・現在/自由記述)
- (4) ボランティアを行ったことでの自己変容(成長)の度合いと内容(6件法と自由記述)
- (5) 今後におけるボランティア参加への意欲(2件法と自由記述)

3. 1. 4. 分析方法

上述「3.1.3」で示した(2)(3)は、記述データを木下(2016)によるM-GTAの手法に倣い、項目ごとにヴァリエーションを書き出し、定義・概念名をつけ、結果を整理するとともに文章化し考察を加えた。また、(4)(5)については、単純集計により全体の傾向を把握した。さらに、(4)についてはKH Coderを用いて計量テキスト分析を行った。

なお、計量テキスト分析とは「計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理しその特徴を捉えるための手法である。換言すれば、樋口(2018)の「内容分析を行う分析」である。また、計量テキスト分析では、これまでの内容分析で用いられていたDictional-basedアプローチ(コーディングルールを作成することで、分析者の理論や問題意識を操作化する手法)とCorrelationalアプローチ(分類を多変量解析に任せる手法)の二つのアプローチが併用されている(樋口, 2018)。本研究では、それらに依拠し、a)各質問項目において、多く出現している語句の確認(樋口, 2018)とb)共起ネットワークによる語句同士のつながり度合いについての確認(樋口, 2018)を行った。

3. 2. 研究2 面接調査

3. 2. 1. 調査の目的

研究2では研究1の結果をもとに、子ども食堂でのボランティアを通じたスタッフの自己意識の変容について、そ

の内容と変容の背景を明らかにすることを目的とする。

3. 2. 2. 調査対象

質問紙調査で承諾の得られたA大学の“子ども食堂サークル”に所属する学生2人(男1人, 女1人)。

3. 2. 3. 調査時期・調査方法・手続き

調査時期は2020年1月。質問紙調査の結果をもとに, 以下で示す質問項目を設定した。実際の調査では半構造化面接の形式を採った。項目ごとの回答(以下, 語り)を結果として掲げ考察を行った。

(質問内容)

(1) ボランティヤを行っての自己変容に係る自己認識。

(2) ボランティヤが「3.1.3. 調査時期と調査方法 (4)」(=ボランティヤを行ったことでの自己変容の度合いと内容)に与えた影響。

(面接調査の手続き)

(1) 面接室で筆者と協力者は自己紹介を行った。

(2) “子ども食堂サークル”に所属する学生における質問紙調査の回答への具体的場面や内容, 理由などを問い, 語りを促した。なお, 協力者の語りによって随時, 質問を重ねた。

(3) 事前に想定した質問を行った。

(4) 質問が終了したら, お礼を述べて面接を終了した。なお, 面接調査の時間は1人10分~20分であった。

3. 2. 4. 分析方法

協力者により語られた内容を逐語録に起こし, ナラティブ分析に依拠して①どのような時に, ②どういった事柄によって, 学生の自己変容が生じたのか, また学生自身は自分の変容をどのように捉えているか(自分が変わったと感じるかを含む)を質的に検討した。すなわち, 2人の協力者の語りの共通点と独自性を抽出し考察を加えた。

4. 結果と考察

4. 1. 研究1の結果と考察

4. 1. 1. 「子ども食堂でのボランティヤ参加への動機」の結果と考察

本質問紙における「子ども食堂でのボランティヤ参加への動機」についての回答を整理し, 結果を下記の(Table 1)で示した。

Table 1 子ども食堂における参加動機

カテゴリー名	概念名	定義	ヴァリエーション
動機	子どもとのふれあい欲求	子どもに関する思いやりの感情の示されている記述	「子どもが好きだから」「子どものために何かしたいから」等(6件)
	自己成長への欲求	自分自身の変容(成長)を求める内容の示されている記述	「自己の成長のきっかけになるから」「子どもと関わって勉強したいから」「学びたいから」「子どもとのふれあいは私にとって貴重だから」等(7件)
	所属の欲求	集団帰属(所属の欲求)を求める内容の示されている記述	「地域での取り組みに興味を持ったから」「サークルに所属してボランティヤしたいから」等(4件)
きっかけ	他者からの紹介	ボランティヤに携わるようになった経緯の示されている記述	「知人からの誘い」「地域の方が勧めてくれたから」「現職の先生に勧められたから」等(4件)

分析の結果, 「動機」「きっかけ」という2つのカテゴリーと, 「子どものふれあい欲求」「自己成長への欲求」「所属の欲求」「他者からの紹介」という4つの概念が生成された。また, 「子どもが好き」「子どものために何かしたいから」といったなどのヴァリエーションからは, スタッフが子どもとの関わりを積極的に望み参加を希望しており, 子どもに対する優しさや慈しみが見受けられた。

次に「自己の成長のきっかけになる」「子どもとのふれあいは私にとって貴重だから」「子どもと関わって勉強したいから」「学びたいから」といったなどのヴァリエーションにおいて、その文脈を辿り、子どもや他者、また社会との関わりから、子どもたちや他のスタッフらと感動体験を共有したいといった情感的欲求からボランティアを始めていることを捉えた。すなわち、子ども食堂に参加するスタッフは、子どもに親和的であり、彼らとの関わりを通して子どもとの関わり方を学び、この先に出会うであろう子どもたちとの関わりも見据えて自分を成長させたいと望んでいることが推察された。櫻井(2002)は、これらの参加動機を「利他的動機」としており、利他的動機はボランティアを始める際に最も重要な心理的要因であると結論づけている。

さらに、「地域の取り組みに興味を持ったから」「サークルに所属してボランティアしたいから」という記述からは、地域やサークルといったコミュニティの中に、自分の身を置きたいという「所属への欲求」(A. Maslow, 1987)が高いのではないかと思われた。これは、自己成長欲求の一つである。このことから、上記のスタッフの子ども食堂への参加動機は、自発的な動機であり、その背景には意識的・無意識的な成長への欲求のあることが窺われた。

他方、「他者からの紹介」という概念に、「知人からの誘い」「地域の方が勧めてくれたから」「現職の先生に勧められたから」というヴァリエーションが認められた。知人や地域といった自分以外の他者やコミュニティからの誘いという側面から捉えれば、彼らのボランティアのきっかけは他律的動機によるといえるのかもしれない。しかし、きっかけが他律的であっても、スタッフは前述のようにそれを自己内部で自律的動機に変換しているとも思われる。

なお、筆者らは上述のような子ども食堂へのボランティアの誘いといったポジティブな宣伝が、子ども食堂自体の認知を高め活動を支える土台になっているとも感じている。

4. 1. 2. 「スタッフが考える“子ども食堂”イメージ(参加前)」の結果と考察

本質問紙における「スタッフが考える“子ども食堂”イメージ(参加前)」についての回答を整理し、結果を下記の(Table 2)で示した。

Table 2 スタッフが考える“子ども食堂”の参加前のイメージ

カテゴリー名	概念名	定義	ヴァリエーション
避難所	哀愁	もの悲しさをイメージした記述	「少し暗い雰囲気」「明るくはないイメージ」「暗いおとなしめ」等(7件)
	静寂	ひっそり静かな場をイメージした記述	「静か」「静かな子どもが多い」「静かな子どもが集まる」等(5件)
	貧困	経済・心理的な貧しさをイメージした記述	「定期的に恵まれない子どもと関わる」「貧困の子どもが多い」「暗く貧困者が集まる場所」等(6件)
	食卓	食事の場をイメージした記述	「子どもに食事を提供する場所」「一緒にご飯を食べるイメージ」「子どもに食事を提供する」(3件)

分析の結果、「避難所」というカテゴリーと、「哀愁」「静寂」「貧困」「食卓」という4つの概念が生成された。このことから、参加前のスタッフが子ども食堂ないし集ってくる子どもたちにヴァリエーションでも認められるような「少し暗い雰囲気」「明るくはないイメージ」「暗いおとなしめ」といったネガティブなイメージをもっていたことが窺われた。また、「静寂」の概念を形成するヴァリエーションに見られる「静か」「静かな子どもが多い」「静かな子どもが集まる」、定期的に恵まれない子どもと関わる」「貧困の子どもが多い」「暗く貧困者が集まる」というヴァリエーションからは、子ども食堂を訪れる子どもに対して、ひっそりとした静かな印象をもっていることが推察された。「貧困」の概念を形成する「定期的に恵まれない子どもと関わる」「貧困の子どもが多い」「暗く貧困者が集まる場所」というヴァリエーションからは、子どもを取り巻く環境・経済・心理的に貧困と呼称される状態であるとイメージされていたと思われた。「食卓」の概念を形成するヴァリエーションに見られる「子どもに食事を提供する場所」「一緒にご飯を食べるイメージ」というヴァリエーションからは、孤食の防止、すなわち子どもたちの孤独感や寂しさを防止また和らげ、少しでも暖かな雰囲気を提供しようとする優しさがイメージされていたとも思われた。

4. 1. 3. 「スタッフが考える“子ども食堂”のイメージ(現在)」の結果と考察

本質問紙における「スタッフが考える“子ども食堂”のイメージ(現在)」についての回答を整理し、結果を下記の(Table 3)で示した。

Table 3 スタッフが考える“子ども食堂”へのイメージ(現在)

カテゴリー名	概念名	定義	ヴァリエーション
居場所	温かい場所	温和な場をイメージした記述	「子どもたち同士、大人の温かい居場所」「とても心温まる場所」等（5件）
	元気になれる場所	活気のある場をイメージした記述	「友達同士で元気いっぱい遊んでいる」「みんなが元気になれる子どもと触れ合う場」等（6件）
	遊ぶ場所	子どもの遊ぶ場をイメージした記述	「一緒に楽しく遊ぶイメージ」「子どもたちが遊べる環境を作る場所」等（5件）
	地域コミュニティ	地域との繋がりをイメージした記述	「地域の子どもと大人が集まるイベント」「地域の人々との交流」等（4件）
	その他	上記のいずれにも当てはまらない記述	「子どもと共通理解を深める場所」

分析の結果、「居場所」というカテゴリーと、「温かい場所」「元気になれる場所」「遊ぶ場所」「地域コミュニティ」「その他」という5つの概念が生成された。スタッフは、子ども食堂でのボランティア活動を経て、子ども食堂が「温かい場所」「元気になれる場所」「遊ぶ場所」「地域コミュニティ」等の4つのイメージに変容した。また、活気のある温かな場所といったポジティブなイメージをもつようになったことが窺える。スタッフの中には、子どもたちが仲良く遊べる環境を自分たちが支えていると自己有用感をもつ者もいたことが推察された。他方、「地域の子どもと大人が集まるイベント」「地域の人々との交流」というヴァリエーションからは、子ども食堂を貧困対策としての施設ではなく、地域交流拠点として捉えるようになった者もいたようであった。

以上のことから、スタッフにおける子ども食堂へのボランティア参加前後で当該施設のイメージが大きく変容したことが推察された。

4. 1. 4. 「ボランティアを行ったことでの自己変容の度合いと内容」の結果と考察

本質問紙における「ボランティアを行ったことでの自己変容の度合い」についての回答を整理し、結果を下記の(Table 4)で示した。

Table 4 スタッフの自己変容の度合いに関する集計

	とてもあった	少しあった	何となくあった	特になかった	あまりなかった	全くなかった
割合(人数)	38%(8人)	24%(5人)	38%(8人)	0%(0人)	0%(0人)	0%(0人)

分析の結果、「とてもあった」を選択したスタッフは8人、「あった」を選択したスタッフもまた8人、「少しあった」を選択したスタッフは5人であった。このことから、子ども食堂に参加したスタッフ21人全員が、自己変容の意識をもったことが推察された。

また、「ボランティアを行ったことでの自己変容の内容」の自由記述について、KH Coderを用いて使用語句を抽出し、その頻度を算出した。結果、文章の語句を抽出し出現回数の多い上位6語句を示した(Table 5)。抽出された語句の上位3位である「貧困」は4回出現した。記述例として「子どもたちから、お金ではない貧困の意味について考えさせられた」「貧困に興味を持ち子どもたちに何かしてあげたい」「貧困には2つの意味があるのだと子どもたちか

Table 5 スタッフの自己変容の意識に関する抽出語句一覧

順位	抽出語句	出現回数
1	子ども	19
2	学ぶ	4
3	貧困	4
4	関わる	3
5	食堂	3
6	接する	3

ら学んだ」などが認められた。次に、抽出された語句の上位2位では「学ぶ」の語句が4回出現した。記述例では、「色々な子どもとの関わり方を学ぶことができた」「子どもと一緒に成長し、今の子どもの悩みや流行にアンテナをはることができた」「子どものために何かしたいという気持ちが高まり学びになった」が認められた。抽出された語句の上位1位では「子ども」の語句は19回出現した。記述例としては、「子どもに対する見方や、関わる時の考え方、いろんな事情をもつ子どもがいることを子ども食堂に参加することを通して感じた」「元気な子どもが多いが学ぶことが多く、笑顔で帰ることができる」「子どもの実態を知ることができたり、自分の体力の限界も知ることができた」などが認められた。このことから、スタッフの自己変容の意識に「子ども」という抽出語句が関与していることが示唆された。

Fig. 1は、スタッフの自己変容の意識についてKH Coderを用いて作成し、共起ネットワークで示したものである。図を見やすくするために共起関係は上位60、Jaccard係数は0.058以上で表示した。特徴的な語句としては、「子ども」「学ぶ」に共起が見られる。記述例としては「色々な子どもとの関わり方を学ぶことができた」「子どもと一緒に成長し、今の子どもの悩みや流行にアンテナをはることができた」「子どものために何かしたいという気持ちが高まり学びになった」などが挙げられる。このことから、子ども食堂においてスタッフが多様な子どもたちとの関わりを通して、子どもから得た情報やふれ合い方を学びとして捉えていることが推察される。さらに、子どもたちから得た学びによって、子どもたちに尽力したい気持ちが高まっているということも窺われた。また、「子ども」「貧困」に共起が見られる。記述例として「子どもたちから、お金ではない貧困の意味について考えさせられた」「貧困に興味を持ち子どもたちに何かしてあげたい」「貧困には2つの意味があるのだと子どもたちから学んだ」などが認められた。このことから、スタッフの考えていた貧困のイメージが変容したことが示唆され、貧困の内実を追及する意思の表明が見られた。上述に加えて、様々な子どもの様態からの学び(=様々な子どもへの多様な関わり方)への意欲も認められた。以上を踏まえると、スタッフは子どもたちとの関わりで感じた顕在的・潜在的内容を自分自身の学びとしていることが推察される(Fig. 1)。

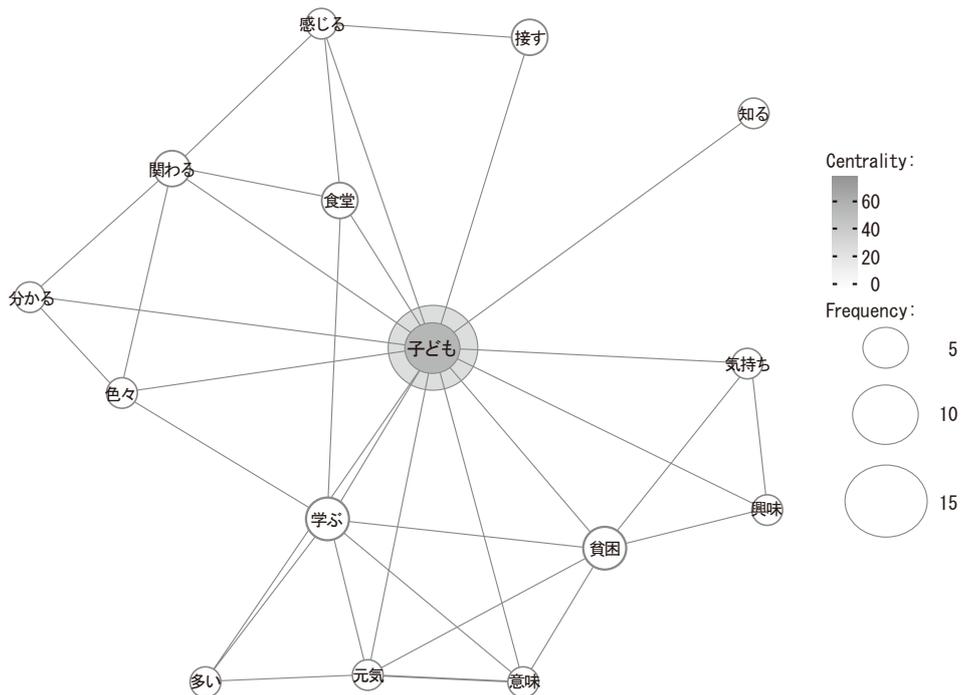


Fig. 1 スタッフの自己変容の意識に関する共起ネットワーク

4. 1. 5. 今後におけるボランティア参加への意欲について

分析の結果、21人のうち20人のスタッフが今後のボランティアへの参加について、肯定的意思を示す「はい」の回答を示した。今後のボランティア参加に「はい」と意欲を示したスタッフの中には、「他の場でも子どもと触れ合う場を通してスキルアップしたいから」「他のボランティアでも子どもと関わりたいから」子ども食堂だけではなく、もっと子どもと触れ合える機会を増やしたいから」「多くの子どもと関わりたいから」などと子ども食堂での活動以外にも、多くの子どもとの関わりから自分自身の成長を促したい記述内容が多く見られた。また、「自分のスキル

アップに繋げ、たくさんの子どもと関わる大人と出会いたいから」「色々な人と出会い、話して学びたいから」「ボランティアをきっかけに、様々な人から多くのことを学んで自分自身に磨きをかけたい」という記述も認められ、子どもと直接交流する場面以外に、子どもたちと普段関わっている大人やそれに関わる人との交流を通して自分自身のスキルの向上に繋がりたいという意識していることが推察された。さらに、「ボランティアをしていく中で、多くの人と関わり自己成長にもつなげられるし、自己有用感を感じられるから」「現在、大学から募集をかけられたボランティア活動には、積極的に参加していてこれからも自分の成長を促すために子どもと触れ合う活動に参加したい」という記述から、ボランティア体験での学びが自信と成長に繋がり、加えて自己有用感を促進させると感じているスタッフの多いことが明らかとなった。またそれが、次のボランティア参加への意欲を喚起することになっているようにも感じられた。

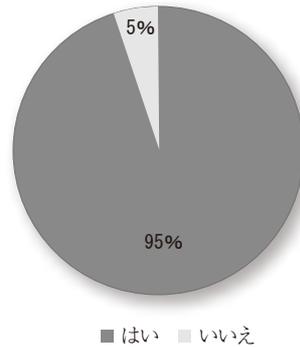


Fig. 2 今後におけるボランティア参加意識の有無

4. 2. 研究2の結果と考察

4. 2. 1. 「面接調査におけるボランティアを行ったことでの自己変容の内容」についての結果と考察

「ボランティアを行っての自己変容に係る自己認識」についての研究協力者2名(Aさん, Bさん)の語りの内容を整理し, (Table 6)で示した。

Table 6 スタッフを行ったことでの自己変容の内容

スタッフを行ったことでの自己変容の内容 Aさん	スタッフを行ったことでの自己変容の内容 Bさん
<ul style="list-style-type: none"> ・子ども食堂で得た1番は、自分の成長っていうのがあるかなあ。自分の強みを見つけたり、弱み…っていうか、自分を知って改善していくっていうのが含まれてるのかな。やっぱ、自分を知るっていうのが成長の1つに含まれたのかなあ。子どもと関わりたいっていうのもあるけど、自分を知って成長に繋げていくっていうか。子どもに映る自分とか、子どもの反応を見て自分はこうなのかなっていうのがあると思いますね。 ・子どもの特徴とか性格を掴むと仲良くなれるし、それで自分も遊んで仲良くできるのが得意だなあって気付けたかなって。それは、結構教育実習にも活かされた。 ・子どもと関わる経験だったり、地域との繋がりが持てるのがありますね。学校以外の先生からコミュニケーションだったり学んだり、学校の先生は学校のことばかりだし、子どもの学校と違う側面を見れたかな。 ・大体行くと、子どもが遊んでるのでそれに混じって、その中で子どもの特徴とか性格を掴むと仲良くなれるし、それで自分も遊んで仲良くできるのが得意だなあって気付けた。一緒に遊んで心の距離を近づけたっていうか。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分自身ボランティアをするまで内気で、もともと消極的だったんですけど、子ども食堂で子どもと関わることを通して、積極的で何事に対しても前向きになれたっていうのは、ありますね。 ・自分自身には性格が穏やかになって、心にゆとりを持てるようになったのが、相手に気遣いができるようになったのが、ボランティアのお陰ですね。あと、いろんな考え方があるんだなーて、何かあっても一旦落ち着いて、狭い視野で考えてないかなーみたいな、もうちょい広い視野で考えてみたりして色々なパターンで物事を考えて、考え方を変わる方向に持っていくようになりました。ボランティアを通して。 ・正直な話をするとも1年生の時のボランティアでの意識は単位の取得が目的だったんですけど、ボランティアをやっている人たちの交流会に参加したりして見て、その中で同い年の人が未来に向かってボランティアに没頭するというか頑張っていて、そういう姿を見て自分も頑張らないとなっていくのも変わったきっかけですね。

面接調査では、本研究で第1の目的としていたボランティア活動に参加することでの自己変容のキーワードについて、質問紙調査の結果に対する協力者の主観的内容を掘り下げる質的な問いかけを行った。「ボランティアを行ったことでの自己変容の内容」について協力者の語りから、Aさんでは、「自己成長」「子どもとの関わり方」「地域コミュニティ」、またBさんでは「考え方」の言葉がキーワードであったと感じられた。

まず、Aさんの「自己成長」という語りからは、子ども食堂での子どもとの関わりにおいて、自分自身の強みや弱みを知ることは自己理解を促進させるとの内容があり、子ども食堂での体験を通して学生が自己への直面化(=自己理解)を試みている様子が窺われた。この自己理解は自己受容の前提であり、人を自己成長させる基盤でもある(稲垣, 2009)。また、「子どもとの関わり方」に関する語りからは、子どもと関わることを通して、子ども一人ひとりの特徴を捉え、見極めることが子どもと心の距離を近づける術であるというAさんの学びが推察された。

Bさんにおいては、「自分自身ボランティアをするまで内気で、もともと消極的だったんですけど、子ども食堂で子どもと関わることを通して積極的で何事に対しても前向きになれたっていうのは、ありますね」と語られている。すなわち、自分自身に対して、内気で消極的というネガティブな感情を抱いていたが、ボランティア活動を行ったことで、前向きでポジティブな自分に変容したとの自己意識が読み取れる。さらに、Bさんの「正直な話をすると、1年生の時のボランティアでの意識は単位の取得が目的だったんですけど、ボランティアをやっている人たちの交流会に参加したりして見て、その中で同い年の人が未来に向かってボランティアに没頭するというか頑張っていて、そういう姿を見て自分も頑張らないとなってしまうのも変わったきっかけですね」という語りから、ボランティア活動を外発的な動機で始めたが、それに関わる人の懸命さに惹かれて自分の意識が内発的なものへと変容したということが窺えられた。これらの語りで見られるように、池田(2001)のボランティアにおける「ある様式」としての学びとは、他者との相互作用を通して「本当の自分」「今まで気づかなかった自分」「新たな自己の発見」を意識化させ、「子どもとの関わり方を知る」「自分を成長させる」などで示される自己理解・他者理解を通じた、自己の在り方の意識化ではないかと思われた。

5. 全体的考察と今後の課題

本研究の目的は、子ども食堂でのボランティア活動に参加したスタッフへの質問紙と面接調査における回答を考察することで、当該の活動が自己変容の意識に及ぼす影響を検討することであった。

研究1では、質問紙調査においては、子ども食堂へのイメージが、参加前のネガティブなものからポジティブなものへと変容したということが特徴的であった。また、子ども食堂でのボランティア活動を行ったことで、回答者全員が、自己変容の意識があることを示した。今後のボランティアへの参加意識については、研究協力者の95%に今後のボランティアへの参加意欲が認められた。ボランティア活動への参加動機が、内発的な動機であるほど、今後のボランティアへの参加意欲も高く認められることが考えられた。

研究2では、面接調査を行い、自己変容の度合いと内容を問いかけ、その回答を検討した。協力者2名の語りから、ボランティア活動における学びについて、彼らが他者との関わりを通して「本当の自分」「今まで気づかなかった自分」「新たな自己の発見」を意識化し、「子どもとの関わり方を知る」「自分を成長させる」など意欲をもったことが窺われた。

今後は、ボランティア活動への参加動機が自己変容の意識に影響しているのかに関する検討などが課題であると考えている。

引用文献

- (1) Abraham Maslow(1987), *Motivation and Personality*. / 小口忠彦訳 人間性の心理学 モチベーションとパーソナリティ, 産能大出版部
- (2) Carl Rogers(1980), *Carl Rogers on Personal Power*. / 畠瀬稔, 畠瀬直子訳 人間の潜在力, 創元社
- (3) 樋口耕一(2018), 社会調査のための計量テキスト分析-内容分析の継承と発展を目指して- 株式会社ナカニシヤ出版
- (4) 池田幸也(2001), ボランティア活動と学び, 学校教育研究16号, pp68-83
- (5) 稲垣応顕(2009), 現代社会とピア・サポート / 稲垣応顕, 松井理納, 集団を育むピア・サポート-教育カウンセリングからの提案-, 文化書房博文社, pp12-20
- (6) 国民生活審議会(2007), 特定非営利活動法人制度の見直しに向けて 国民生活審議会総合企画部会, pp1-33

- (7)厚生労働省(2007), ボランティアについて, pp1-14
https://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/12/dl/s1203-5e_0001.pdf 2019.12.4 観覧日2019.12.7
- (8)木下康仁(2016), グランデット・セオリ・アプローチの実践－質的研究への誘い－ 弘文堂
- (9)厚生労働省(2018), 地域共生社会の実現に向けて
<https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000184346.html> 観覧日2019.12.11
- (10)神谷純子(2019), 子ども食堂訪問報告, 帝京科学大学総合教育センター紀要, 総合学術研究, 第2巻, pp13-18
- (11)三谷はるよ(2016), ボランティアを生みだすもの, 有斐閣
- (12)生涯学習審議会(1992), 今後の社会の動向に対応した生涯学習の復興方策について(答申)
https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo2/siryou/010301j.htm 観覧日2019.12.7
- (13)桜井政成(2002), 複数動機アプローチによるボランティア参加動機構造の分析－京都市域のボランティアを対象とした調査より－, 日本NPO学会機関紙, 第2巻第2号, pp111-122
- (14)東京都教育委員会(2014), 東京都教育委員会の基本方針
<https://www.kyoiku.metro.tokyo.lg.jp/administration/general/principle.html> 観覧日2019.12.7
- (15)湯浅誠(2019), 子ども食堂の過去・現在・未来, 地域福祉研究, pp15-27

A Study on Self-Transformation in Volunteer Staff

– Through welfare practice in the children’s cafeteria –

Anri ODA* · Misaki MATSUSHIMA* · Masaaki INAGAKI**

ABSTRACT

In this study, I pay attention to the consciousness in the self-transformation of the volunteer staff who participated in a children restaurant. I intend to clarify the influence of the children restaurant on a volunteer’s understanding and discovery of oneself. I performed inventory survey targeting 21 students of national University A and prefectural University B located in the Hokuriku area. I gathered answers by a freedom description, using M-GTA. performed an image of “children dining room,” which motivates the volunteer staff to think about a positive or negative category. It is suggested that the motive for volunteer participation is due to positivity in care for others. In addition, results indicated to have transformed a volunteer’s mindset on “children restaurant,” from negative image before participation, to positive image after volunteer participation. Furthermore, based on an above-mentioned result, I carried out a semi-structured interview to confirm the results. Through the result, the volunteer in the children restaurant discovered a “one true self” that “one whom did not notice so far.” The “discovery of the new self” was through the interaction with others, and in process made the way for the self-consciousness to learn self-understanding, understanding of others, such as “I bring oneself up,” and “I was concerned and cared for the child.”

* Master Course (School Education) ** School Education